



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第52号(R5. 3. 24)

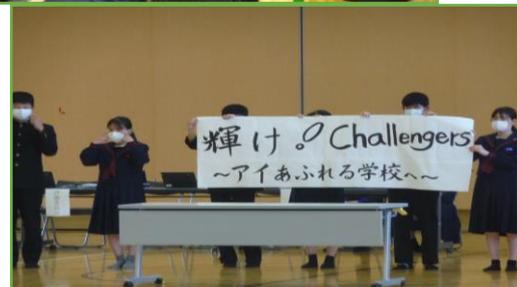
令和4年度離任される先生方

今回の人事異動により、本校の教職員のうち13名の先生方が本校を去られることになりました。本校の生徒のために授業や事務手続き等で大変お世話になりました。名残惜しくありますが、新しい職場でも活躍されることを河東中生徒と関係者一同心より祈っています。なお、異動先については4月1日付の発表となります。

離任者	教科等	在籍年
笠井康行	教頭	1年
中村実桜	国語・7年1組担任	4年
渡邊雅之	体育・7年3組担任	6年
杉野祐一	数学・7年5組担任	4年
井上裕二	理科・7学年副任	2年
西嶋貴洋	技術・7学年副任	2年
金子恵理子	理科・9年1組担任	8年
賀門雅也	社会・9年6組担任	6年
森多妃子	体育・9学年副任	6年
野本健輔	数学・県教育センター	8年
松尾由起子	事務室	9年
ケン・ミラー	ALT	3年
ダロン・モアヘッド	ALT	3年

今回の生徒総会はタブレットを使ってペーパーレスでの実施

3月22日(水)生徒総会を行いました。来年度の生徒会活動のスローガンは、「輝け!Challengers~アイあふれる学校」に決まりました。とても素敵なおフレーズです。来年度も、先輩たちが築いてきた河東中の伝統を引き継ぎながら、みんなの力でより良い学校にしていきましょう。大切なのは、全校生徒一人一人がチームの一員であることを自覚して、当事者意識をしっかりと持つことではないでしょうか。



授業研修の風景

今週は、本年度最後の公開授業が2本行われました。体育科の古川先生と森先生による8年生女子のダンスの発表会を公開するものでした。

古川先生・森先生(体育)

曲に合わせてダンスの振り付けを考える、個の動きとチーム全体の動きのバランスや配置を考える。よく考えられた創作ダンスの公開。



創作ダンスの発表会が授業公開されました。8年生の生徒たちはどのグループも短時間で独創的な振り付けを考えていました。もちろん、ダンスも上手ですし、チームワークも素晴らしかったです。プリントやタブレットを使って相互評価もきちんとつけていました。来年度の体育祭でのダンスの出来栄が今から楽しみと感じました。

先人はどうやって日本を高度成長させたのか？ ～ 西山弥太郎が考えた敗戦後の日本の復活方法とは ～

40年前にアメリカで出版された本で『ジャパン アズ ナンバーワン —アメリカへの教訓—』という本があります。文字通り、世界一豊かになった日本は戦後どうやって高度成長をとげたのかをアメリカ人が分析した全米のベストセラーです。

しかし、今はどうでしょうか？—スイスの IMD (国際経営開発研究所) が毎年公開している「国際競争力」では、昨年の日本の順位は総合34位でした。ちなみに、30年前は、4年連続で日本は1位でした。例えば、30年前は、IC (集積回路) の生産は世界一で、シェアでいうと日本は世界の半分を占めていました。今は、一けた台で外国に頼っています。これらの数字を持ち出さなくても、長引く不況や30年近くも日本人の給料が上がってない事実から、日本の経済成長がずっと停滞しているのがわかるはずです。

さて、今日ご紹介するのは、敗戦後焼野原だった日本の経済を復活させることに貢献した一人の日本人の話です。西山弥太郎という人です。戦後、日本を豊かにしてくれた先人は何万といいますが、その中で日本の産業のあるべき姿を示した人と言っていていいでしょう。かつて先人たちは、「日本は資源がない国だから、資源を輸入して付加価値をつける加工をして、外国に輸出することで豊かに暮らせる」と言いました。そのことを戦後最も早く現実に示した人と言っていていいでしょう。

戦後まもなく、西山弥太郎は千葉に巨大な製鉄所を建設します。今の川崎製鉄です。この事業は、2つの点でそれまでにない画期的なものでした。1つは、世界で初めての臨海製鉄所だったことです。それまで世界の製鉄所は、原料の鉄鉱石や石炭の採れる所の近くにつくられていました。明治時代につくられた八幡製鉄所も筑豊炭田の近くという立地条件でした。しかし、弥太郎は臨海にすることで、海外の良質な原料の大量輸入と加工生産した鉄製品の大量輸出を可能にする大型船利用を思いつきました。日本を加工貿易立国にするための試みでした。2つ目は、今でいうウォーターフロントの先駆けで、海の近くの軟弱地盤に大規模な製鉄所を建設する技術を開発したことです。弥太郎のつくった製鉄工業の躍進によって、その後の造船、自動車をはじめとする重化学工業はもちろん、家電をはじめとするエレクトロニクスの発展につながりました。弥太郎の発想と実業によって、その後の日本の高度経済成長の関門が開かれたわけです。



弥太郎はこう言ったそうです。「戦前の日本の指導者たちの考え方は、「日本は国が小さい。大きなことをいってもダメだ。小さい機械でヨーロッパ式に、いるだけのものをつくっていこう」というところにあった。したがって、よけいにつくって売り広めようなどという商魂は、毛頭なかったのである。(中略)しかし、戦後は世界情勢もすっかり変わったし、国内事情も変わった。世界は交通機関の発達によって著しく狭くなった。貿易は必ず自由貿易になる運命にある。そうすれば、コストの競争になる。そこで私たちは、製鉄の方式も変えて、大規模生産方式をとり、コストを世界的レベルまで下げるべきである。」

弥太郎と鉄の出会いは、学校卒業後、14歳のとき、金物屋をしていたおじの店で働くようになってからのことです。弥太郎少年はこう思ったそうです。「金物屋がこれほどもうかるならば、こうして商品を売るより、それをつくるもつとである鉄をつくればもっともうかるはずだ。そのためには勉強しなければならない。学校に行かなければ」と考え、半年足らずで手伝いをやめ、勉強に精を出すことにしたそうです。

さて、話を冒頭の本に戻します。『ジャパン アズ ナンバーワン』の著者であるヴォーゲルは、なぜ日本は世界のトップになったのかをこう結論付けます。「日本の高い経済成長の基盤になったのは、日本人の学習への意欲と読書習慣である」。また、ヴォーゲルは日本人の1日の読書時間の合計が米国人の2倍に当たることや、新聞の発行部数の多さなどにより日本人の学習への意欲と読書習慣を例証しています。

弥太郎が活躍した70年前も『ジャパン…』が書かれた40年前も今も変わらないのは、日本には資源がないということです。変わったのは、スマホやオンラインゲームが氾濫し、学習意欲や読書時間を確保するのが難しい時代となったことです。しかし、豊かで国際的にも力のある日本にしていくためには、日本の特性を知り、新しい日本の学習をつくることではないでしょうか。